

石上露子と『婦女新聞』

大谷 渡

一

石上露子（一八八二～一九五九）は、与謝野晶子・山川登美子・玉野はな子・茅野雅子らと並ぶ『明星』のすぐれた女性歌人の一人だった。彼女は、一九〇三年（明治三六）の秋、満二一歳のときに新詩社の社友となり、同年一〇月号の『明星』にはじめて短歌を寄稿した^①。以後、一九〇八年（明治四一）一月号に至るまでの同誌上に、石上露子またはゆふちどりの筆名で短歌八〇首、美文五編、詩一編が掲載されたが、それらの作品の文学的価値については、すでに島田謹二や松村緑らの諸氏によって高く評価されている^②。

とくに松村緑氏は、国文学研究の立場から長年にわたって彼女に関する伝記的研究に力を注ぎ、その成果は同氏編の『石上露子集』（中央公論社刊、一九五九年）に結集された。そして、この『石上露子集』を基礎にして、『明星』に掲載され

た彼女のすべての作品が、『明治文学全集51』（筑摩書房刊、一九六八年）に収録された。また、彼女の一生とその心象風景を描いた吉屋信子の作品「富田林の旧家」が、『小説新潮』の一九六四年八月号に掲載され、ついでこの作品が吉屋信子の『ある女人像』（新潮社刊、一九六五年）に収められたことによつて、自我に目覚めて悩みつづ、明治・大正・昭和を生きた『明星』の歌人石上露子の生涯が広く一般に知られたのである^③。

石上露子の本名は杉山孝^{たか}、彼女は一八八二年（明治一五）六月一日に、大阪南河内の富田林の杉山団郎の長女として生まれた。富田林は一六世紀の後半に興正寺別院の寺内町として開かれた町であるといわれているが、杉山家はこの寺内町の建設に参画した土地の有力者「八人衆」の家系を継ぐと伝えられる富田林きつての旧家であり、代々酒造業をも営む大地主であった^④。酒造業は、露子が生まれて数年の間に廃されたようだが、一九〇〇年（明治三三）における杉山家の「土地台

帳総計簿」によると、所有地は一二か町村にもおよんでいて、総計が六一町五畝一九歩、そのうち田地が五七町二反六畝二歩を占めていた。^⑤現存する露子の生家は、古い町並を誇る富田林でも最古の建築物といわれる貴重な文化財であり、杉山家はまぎれもなくこの地方の豪家であった。

露子は、江戸時代以来この豪家に培われてきた文学的教養を身につけつつ聰明な娘として育ったが、少女期に実母と生別し、はやくから継祖母や継母との陰湿な葛藤に悩まねばならなかった。^⑥しかも露子は、入夫婚姻によってこの豪家を相続しなければならぬという定めを負っていたのだが、新聞や雑誌を通して近代の新しい思想や精神に触れる機会をもった彼女は、古い家の制度につながれてその重圧から逃れえぬ自己をいっそう鮮明に自覚し苦悩せざるをえなかった。彼女は、そうした現実の苦悩の中に閉ざされていた自我を解き放ち、自己の苦悩を自由に表現することのできる世界を求め、一九〇一年（明治三四）から『婦女新聞』や浪華婦人会の『婦人世界』に作品を投稿するようになっていった。^⑦

『婦女新聞』は、一九〇〇年（明治三三）五月一日付をもって創刊された女性向けの週刊新聞であり、第一号に掲げられた「発刊の辞」と「婦女新聞の目的」と題した文章には、公平な見地から「女子教育の大方針」や「女子大学の設立」、「母体の健否」といった女性に関する問題を取り上げて広く世人とともにこれを研究し、「女子諸君の地位を高め」た

いと記されていた。^⑧創刊の翌年一九〇一年（明治三四）の同紙には、「一夫一婦論」（二月二日付第三八号）、「德育方針の懷疑時代」（二月一日付第四〇号）、「社会改良と婦人の勢力」（六月一日付第五七号）、「女子と労働」（九月三〇日付第七三号）といった社説が掲載されており、それらの社説をみることによって、露子が投稿しはじめたころの同紙の性格がうかがえる。

『婦女新聞』の一九〇一年七月二九日付第六四号には、「継母」について（晴江女史としのぶの君に）と題した露子の文章が夕ちどりの名で掲載されている。以後、夕ちどりの小品・随筆・小説などが同紙上に掲載されるようになっていったが、とくに一九〇四年（明治三七）ごろに執筆された彼女の作品には注目すべき力作が多い。また彼女は、一九〇三年（明治三六）から一九〇四年の中ごろにかけて『婦女新聞』の読者の投書欄「はがきよせ」にも積極的に投稿し、大阪での「婦女新聞読者会」の結成を呼びかけたりしていた。^⑨そして彼女は、ちょうどこの時期の一九〇三年に新詩社に入り、翌年一九〇四年の『明星』にはほとんど毎号作品を寄稿してこの年のうちに短歌四二首と美文五編を同誌上に発表したのだが、これは『明星』に掲載された彼女の作品総数の半分以上にもあたっていた。このようにみると、彼女の創作意欲は、一九〇四年（明治三七）の時期にもっとも高まっていたとみてよい。

ところで、日露戦争がはじまってまる二か月後の『婦女新聞』一九〇四年四月一日付第二〇五号には、夕ちどりのすぐれた厭戦の作品、小説「兵士」が掲載されている。この小説「兵士」については、『歴史と神戸』第八九号（一九七八年五月）に「石上露子の『兵士』について」と題する中山敦子氏の紹介文が掲載されていて、石上露子の再評価の必要性が提起されている。私自身もこの「兵士」と題する夕ちどりの作品に着目して、国立国会図書館所蔵の『婦女新聞』の中から彼女の作品および彼女に関する記事の収集をおこなったが、昨年末から今年（一九八三年）にかけて不二出版から『婦女新聞』の復刻版が刊行されるにおよび、ますます詳細な検討が可能になってまことに便利である。この新聞が石上露子研究の基礎的資料であることはいうまでもないが、石上露子研究の第一人者であつて今は亡き松村緑氏が、『婦女新聞』を心にかけてつもついに同紙のバックナンバーを閲読する機会をもたれなかつただけに、いっそう重要である。

なお、『明星』に掲載された彼女の作品には、日露戦争に触れたものがいくつか存在するが、とくに一九〇四年の『明星』七月号に掲載されたゆふちどりの短歌「みいくさによひ誰が死ぬさびしみと髪ふく風の行方見まもる」は、新詩社のすぐれた文芸批評家で明治末年のいわゆる大逆事件の弁護人としても知られる平出修に注目された。平出は、『明星』の同年八月号掲載の「最近の短歌——新詩社七月小集席上所

感」において、「戦争を謡うて、斯の如く真摯に斯の如く懐愴なるもの、他に其比を見ざる処、我はほこりかに世に示して文学の本旨なるものを説明してみたい」とのべて、この歌を高く評価したのであった。『婦女新聞』の一九〇四年六月二〇日付の「はがきよせ」欄には、「此里の可憐の子ひとり、南山のそれにけなげなる戦死せりしと人には泣きて語るなり」という夕ちどりの文章が掲載されていることからみて、前掲の彼女の短歌が、身近にもたらされた戦死の悲報に触発されて詠まれたものだったことが推測される。

ちなみに、与謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」が発表されたのは一九〇四年九月号の『明星』であり、大塚楠緒子の「お百度詣」が『太陽』に掲載されたのは一九〇五年（明治三八）一月のことだった。この二つの作品は、いずれも一般によく知られているが、大塚楠緒子が一九〇四年六月一日付の『太陽』に「進撃の歌」と題した戦意高揚の勇ましい詩を発表していたことを思うとき、石上露子の厭戦の作品の意義は大きい。とりわけ、開戦後まもない時期に『婦女新聞』に発表された夕ちどりの小説「兵士」は、女の情感と女の理をもつて、男・戦争・軍隊の非人間性を訴えようとした衝撃的な作品だった。そこには、戦争・軍隊を正当化して女性あるいは人間そのものを完全に否定しようとする国家の論理、すなわち男の論理にたいする露子自身の激しい怒りがこめられていた。それだけにこの作品は重要であり、発表された時

期からみても、またその内容からみても、与謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」に勝るとも劣らぬ厭戦の作品であったと私には思えるのである。ところで、在来の彼女に関する文献では、『平民新聞』と彼女との関係をとりあげて、これとの関連で彼女の厭戦の思想に触れられたりもしているので、次にこの点についてすこしのべておくことにしたい。

二

前掲の松村緑編『石上露子集』には、石上露子の自伝「落葉のくに」が収録されている。この自伝によれば、彼女は『平民新聞』を購読していて「平民社に集ふ人々」と個人的な交流があったとされているが、この点にとくに力点をおいたかたちでの自伝の紹介研究として、家永三郎氏の「石上露子日記について——明星派歌人と社会主義思想との交渉」（『明治大正文学研究』第一五号、一九五五年二月）がある。

この家永氏の論文では、日露戦争中の石上露子について「すでに平民新聞を通じて反戦のいぶきにも触れた露子である（後述）」と記されたうえで、自伝の中の『平民新聞』や平民社の人びとと彼女とのかかわりについて語られた箇所を紹介がなされていて、彼女が一九〇三年（明治三六）一月一日から一九〇五年一月二十九日に至るまでの一年余りのあいだ発行されていた週刊『平民新聞』の読者だったことになって

いる。しかし、この週刊『平民新聞』を調べたかぎりでは、彼女が同紙の読者だったという事実はでてこないし、自伝そのものにも彼女が週刊『平民新聞』を読んでいたとは記されていないのである。

露子の自伝には、彼女が南河内郡の郡長夫妻とともに秋の赤十字社大会に出席する目的で上京し、その折に新詩社を訪ねて与謝野晶子と親しく語りあったことなどについて記されている箇所がある。この露子の上京は、『明星』の一九〇五年一月月号に、「河内なる石上露子、盛岡なる大信田落花の二氏は去月赤十字社大会の参列を兼ねて上京し、数日滞在せり」と記されていることからみて、同年一月二〇日に上野公園で開催された日本赤十字社の第一三回社員総会に出席するためのものだったことがわかるのである。⑧。そして、彼女の自伝には、このときの東京に関する叙述が完璧に終わったあと、まったく別の話として次のような体験が語られている。

夢二さんが書いて下さった二本の女扇子は恋の詩と石川の月見ぐさ。私はこんなものよりも平民新聞のさし絵のやうな胸をうつ。

親は故郷に子は嶋原にさくら花かや散りちりにとあんな（俗謡ながら）のが望ましかつたのに、高級なぬり骨箱地ばりのをもち出したのがいけなかつたと気がつくくと、まだまだ何事にも上すべりの身みづからをかなしむ。

文中の夢二は、竹久夢二のことであろう。ところで、夢二のさし絵は、前掲の日露戦争中の週刊『平民新聞』にはまったく掲載されていない。日露戦争後の一九〇七年（明治四〇）一月一五日から同年四月一四日まで発行された日刊『平民新聞』には、夢二のさし絵がさかんに掲載されている。そして、日刊『平民新聞』の一九〇七年四月四日付第六六号に掲載された竹久夢二のさし絵には、「親は故郷にわしや嶋原に桜花かやちりぐくに」と記されていたことからみて、露子が読んでいたというこの場合の『平民新聞』は、日刊『平民新聞』であつたと考えられるのである。ただし、このことをもつて、彼女が週刊『平民新聞』を読んでいなかったとはもちろんいえないのであつて、ここではもつぱら一九〇七年に彼女が日刊『平民新聞』を購読し、社会主義に強い関心を示していたということに注目しておきたい。それにしても、当時結婚して東京牛込区に住んでいた竹久夢二に、石上露子はいつどこで会つたのだろうか、疑問が残る。

自伝「落葉のくに」には、右に掲げた文章のすこし後に次のようにも記されている。

平民新聞が配達されると云ふだけでそのすぢの眼が光る。
人の心を変にゆがめる。宮崎滔天氏の来訪をうけてよりは、ことにそれがいちぢるしい。もつとも平民社に集ふ人々より個人的な文通がしげくあるせむもあらう。

同志と云ふよりむしろ乙女の身の、と云ふのに興味をもち出した人もある。私はそんなものずきな、気まぐれものでは無い。もつともつとこの問題を得心のゆくまでほりさげて自分の物にして見たいからなの。

今日も警察署長が来訪、いたづらつ児の火なぶりの様に云はれる。この温厚な署長とお父様と二人を見て私はかへつてお気の毒でならない。

「宮崎滔天氏の来訪」の事実があつたかいなかについては今のところ不明だが、滔天の兄の宮崎民蔵が土地復権同志会の遊説中に彼女を訪ねていたことは、民蔵の「巡歴日誌」の記述によつて知ることができる。すなわち、「巡歴日誌」の一九〇七年（明治四〇）五月のところに、「二十四日 富田林町 杉山孝子女史加盟す、富家」と記されていて、彼女はこのとき土地復権同志会に賛同し入会したものとと思われる。

ところで、前掲家永氏の「石上露子日記」について——明星派歌人と社会主義思想との交渉」には、「杉山女史は筆者のぶしつけな質問」にたいして「親しく答書を与へられた」と記されていて、家永氏に宛てられた次のような露子の手紙が紹介されている。

平民社の人々との交渉は、宮崎氏が興味を持って、社中でお話になつたらしう、おもはぬ人々からおたよりを次々に頂きました。いまはほとんどが故人で御座います。親しうお尋ねうけましたのは、これも故人になつた

代議士の南氏だけだったかと存じます。まゝしい母と同郷とやらで、かたがた訪問を受けました事が御座います。

露子の継母エイの実家は、大阪府泉北郡国府村（現在、和泉市）の小西家であつたから、継母エイと同郷の代議士の南とは、国府村の北部に隣接していた同郡伯太村（現在、和泉市）出身で、のちに衆議院議員となつた南鼎三のことであろうと思われる。南鼎三は、一九二〇年（大正九）五月におこなわれた第一四回総選挙と一九三七年（昭和一二）四月におこなわれた第二〇回総選挙の二回にわたつて、大阪府第六区から立憲政友会所属の代議士として選出されており、死去したのは一九四三年（昭和一八）九月二日だつた。そして、この南鼎三について前掲宮崎民蔵の「巡歴日誌」には、民蔵が富田林の杉山家を訪問した翌月、すなわち一九〇七年（明治四〇）六月のところに、「十六日 福島に至り大阪平民社の森近運平を訪ふ座に泉北郡の南鼎三あり会旨を聞いて加盟し同志求合を協議す」と記されている。そうすると、前掲の家永氏の論文で紹介されている露子の手紙の中の「宮崎氏」とは、宮崎民蔵のことであつて、「宮崎氏が興味を持つて」彼女の話を語つたとされている平民社とは、日刊『平民新聞』の廃刊後に森近運平が再興した大阪平民社のことであつたのだろうか。この点については、にわかには断定することできないところだが、前掲家永氏の論文中の露子の手紙に記されている「代議士の南氏」が、「宮崎氏」や「平民社」との関係で語られ

ていることからみて、ここではそうした可能性もあるということを描き出すことにおきたい。

ともあれ、以上のようにみてくれば、一九〇七年（明治四〇）における石上露子の思想的関心の方向がうかがえるのだが、実はこの年一二月に、彼女は旧家の重臣に抗しきれなくなつて意にそまぬ婚礼の席についたのだった。そして彼女は、翌年一九〇八年（明治四一）の『明星』に短歌を発表したのを最後として、文筆活動を断たざるをえなかつたが、それは夫の執拗な干渉と妨害によるものだったと伝えられている。

ちなみに、松村緑氏は『石上露子集』の解説で、「当時の社会主義者仲間では西川光次郎、島中雄三などの人々の贈つた写真が残つてゐる」とのべているが、のちに社会運動家として知られた島中雄三は、『婦女新聞』の中心的ジャーナリストの一人でもあつた。一九〇五年の秋に露子が上京したことにについてはすでにのべたが、彼女の自伝にはこの時の東京での出来事に関する記述に続いて、「上京をあとより知りて主筆と共に足ざりしてくやみしよなど云ひせしは婦女新聞の誰れ」とのべられていて、「するこ様その他よりも相ついでたよりを見る」と記されている。このすゝめは島中翠湖、すなわち島中雄三であろうと思われる。そして、島中はずつとのちの一九三八年（昭和一三）一月二七日付の『婦女新聞』に掲載された「狂濤飛沫——宮崎旭濤を繞る人々」の中で、仙台在住の青年詩人で『婦女新聞』の寄稿家だつた宮崎旭濤

が、同じく『婦女新聞』の寄稿家として知られていた夕ちどりに会うために、はるばる大阪南河内の富田林を訪れたという思い出話を書いていた。^⑧

こうしてみると、石上露子と島中雄三の交流は『婦女新聞』を通してはじまったものと推測されるのだが、露子が購読していたと思われる日刊『平民新聞』の一九〇七年四月七日付第六九号の「編輯局より」に、「島中翠湖君が来て公判記を手伝ってくれる、お馴染の竹久夢二君が片隅で新聞を見て居る」などと記されていたことを考えると、島中雄三は露子が自伝の中で「個人的な文通」を交わしたと記している「平民社に集ふ人々」の一人とみてよいかもしれない。いずれにしても、若き日の石上露子の思想や動静を知るうえで、『婦女新聞』の彼女に関する記事の詳細な検討が必要なことには明らかである。

さて、その『婦女新聞』に掲載された石上露子の作品には、次のようなものがある。

一九〇一年(明治三四)

「継母」について(夕ちどり(七月二九日付第六四号))。

「河内金剛山下の一小都」夕ちどり(八月二二日付第六六号)。

「柿」夕ちどり(二月二一日付第七九号)。

一九〇二年(明治三五)

「母子草」ゆふちどり(四月七日付第一〇〇号)。

「雲雀」夕ちどり(五月五日付第一〇四号)。

「わが昨今」夕ちどり(六月二六日付第一一〇号)。

「まぼろし日記」夕ちどり(九月八日付第一二二号)。

「小川」夕ちどり(二月一七日付第一三三号)。

「琴」夕ちどり(二月一日付第一三四号)。

一九〇三年(明治三六)

「時鳥」夕ちどり(六月二二日付第一六三号)。

「野薔薇物語」夕ちどり(六月二九日付第一六四号)。

「庚申猿(上)」夕千鳥(七月二七日付第一六八号)。

「庚申猿(中)」夕千鳥(八月三日付第一六九号)。

「庚申猿(下)」夕千鳥(八月一〇日付第一七〇号)。

「初秋」ゆふちどり(八月三一日付第一七三号)。

「山分衣」夕ちどり、小夜千鳥(十一月三日付第一八五号)。

「山分衣(つゞき)」夕ちどり、小夜千鳥(十一月三〇日付第一八六号)。

「山分衣(つゞき)」夕ちどり、小夜千鳥(二月七日付第一八七号)。

一九〇四年(明治三七)

「理想の男子」夕千鳥(二月一日付第一九二号)。

一九〇四年(明治三七)

「第百九十五号の俚歌評釈につきて」ゆふちどり(二月一日付第一九七号)。

小説「兵士」夕ちどり(四月二一日付第二〇五号)。

「芳岳の君に」夕ちどり(四月二五日付第二〇七号)。

「芳さん」夕ちどり(五月二三日付第二二二号)。

「芳さん」夕ちどり(五月二三日付第二二二号)。

「芳さん」夕ちどり(五月二三日付第二二二号)。

「幽思」ゆふちどり(六月六日付第二二三号)。

「わすれな草」夕千鳥(六月二七日付第二二六号)。

「をとめ」夕ちどり(八月二二日付第二二四号)。

「こほろぎ」夕ちどり(九月二二日付第二二七号)。

一九〇五年(明治三八)

「新愁」夕ちどり(一月一日付第二四三三号)。

「田園日記(上)」夕ちどり(四月一七日付第二五八号)。

「田園日記(中)」夕ちどり(四月二四日付第二五九号)。

「田園日記(下)」夕ちどり(五月一日付第二六〇号)。

「異性」杉山孝子(七月三日付第二六九号)。

小説「おもかげ(一)」夕ちどり(七月三日付第二六九号)。

小説「おもかげ(二)」夕ちどり(七月一〇日付第二七〇号)。

小説「おもかげ(三)」夕ちどり(七月一七日付第二七一号)。

小説「おもかげ(四)」夕ちどり(七月二四日付第二七二号)。

小説「おもかげ(五)」夕ちどり(七月三一日付第二七三号)。

小説「おもかげ(六)」夕ちどり(八月七日付第二七四号)。

「幸子の君へ」夕ちどり(一〇月九日付第二八三三号)。

一九〇六年(明治三九)

「絹手毬」夕千鳥(一月一日付第二九五号)。

以上の作品の中から、ここでは「野薔薇物語」「兵士」「幽思」「をとめ」「異性」「絹手毬」を紹介したい。いずれも若き日の石上露子の精神活動を知るうえでの貴重な資料であり、在来の彼女に関する文献と照合して読めば、いくつつかの問題

点が生ずることは明らかである。

註① 『明星』の一九〇三年一〇月号の「社告」には、「爾後入社せられたる同志の清友は次の諸君に候」とのべられていて、八人の氏名とともに「石上露子(河内)」と記されている。

② 『愛書』第一五輯(台湾愛書会、一九四二年八月)には、松風子編「石上露子集」が掲載されている。松風子とは、当時台北高等学校教授で台北帝国大学の講師だった島田謹二の筆名であり、同氏はこの「石上露子集」の注解および巻末の評論で露子の作品を高く評価している。

『国語と国文学』の一九五二年七月号には、松村緑「石上露子実伝」が掲載されており、松村氏はその中で、石上露子の作品に心をひかれて彼女の伝記を書くに至った経緯についてのべている。ちなみに、『読売新聞』の一九一三年(大正二)七月三日付に掲載された長谷川時雨の「明治美人伝(外)」には、石上露子の唯一の詩で佳作として名高い「小板橋」が冒頭に掲げられていて、若き日の彼女のおもかげが次のように紹介されている。

かつて、雑誌「明星」には、すぐれたる五人の女詩人があつた。晶子、とみ子、花子、雅子と此露子とで、其うちの最も美しき女と唄はれ、其歌の風情と、姿の趣をあはせて、白菊の花にたとへられてゐた。

この「明治美人伝」は、のちに長谷川時雨の『美人伝』(一九一八年)に収録され、石上露子の名と彼女の詩「小板橋」が、詩歌を愛する人びとの心にながく残ることとなったのである。

なお、一九〇七年(明治四〇)の『明星』一二月号にゆふちど

りの名で掲載された「小板橋」は、次のような二連の小曲風の詩であった。

ゆきずりのわが小板橋いばば

しらしらとひと枝のうばら

いづこより流れか寄りし。

君まつと踏みし夕に

いひしらず泌みて匂ひき。

今はとて思ひ痛みて

君が名も夢も捨てむと

なげきつつたわれば、

あゝうばら、あともとどめず、

小板橋ひとりゆらめく。

③ 『ある女人像』は、のちに『吉屋信子全集11』（朝日新聞社刊、一九七五年）に収録された。

④ 『富田林市誌』（富田林市役所刊、一九五五年）、六五ページ。杉山家の「土地台帳総計簿」は、富田林市史編纂室で閲覧した。

⑤ 酒造業の廃止については、松村緑編『石上露子集』（中央公論社刊、一九五九年）、一六七ページ参照。

なお、『日本立憲政党史』の一八八二年（明治一五）四月二七日付第三七号には、河内国酒造業人が大阪府知事に提出したという「酒造業者製造所税免除之請願」が紹介されており、この請願文の冒頭には、「府下河内国酒造業人七十名惣代人（杉山團郎）（浅野誠太郎）（松田基平）（大堀伊十郎）（林吉次郎）謹テ大阪府知事閣下ニ請願スル酒造製造所税免除ノ理由并ニ其事

実左ニ具陳致候」と記されている。

⑥ 江戸時代以来杉山家に蓄積された文化的伝統と教養については、前掲松村緑「石上露子実伝」および同氏編『石上露子集』を参照。なお、この点については、明石利代『「明星」の地方歌人考——新詩社の文学運動の側面』（笠間書院刊、一九七九年）でも多少触れられている。

⑦ 『婦女新聞』一九〇四年五月二三日付第二一一号の「大阪日より」には、「此頃青年婦人の団体たる浪華婦人会には、清水町に割烹教場を設けて教授致居候」と報じられており、同年一月二一日付の『婦女新聞』には、「浪華婦人会の美拳 大阪なる同会は会員三百余の小団体なれども皆熱心の人にて今般出征軍人幼児保育場を設けたる由」と報じられている。そして、同紙一九〇七年一月三〇日付第三九九号には、「浪華婦人会の閉会」と題して、「明治三四年創立以来雑誌『婦人世界』を発行し家政塾及幼児保育所等を設け孜孜世の為に努力し来りし浪華婦人会は今度閉会したりとの報あり吾等は其過去の労を多とし而して関西婦女界の将来の為に深く之を惜しむ」と記されている。

⑧ 『婦女新聞』第一号の発行所は、本所区横網町一丁目一九番地、婦女新聞社となっており、定価は一部五厘、一年分前金郵税共で一円二〇銭だった。

同紙は、一九四二年（昭和一七）二月一五日付をもって廃刊されるまで、社主福島四郎によつて四二年間刊行され続けた女性の新聞であり、近代女性史研究の貴重な資料として注目されている。

⑨ 『婦女新聞』の一九〇三年一月二八日付の「はがきよせ」欄に掲載された夕ちどりの文章には、「大阪の地に婦女新聞読者会

三八年(昭和二三)六月一日号には、熊谷武至の「歌集解題余談鈔五八」が掲載されていて、「明星」に発表された石上露子の短歌のほとんどが紹介されているのだが、この『水麩』に掲載された露子の作品集では、前記の二首の短歌はいずれもそのまま掲載されていて伏字にはなっていない。

前掲杉本藤平の「日新誌」は、富田林市史編纂室で閲覧した。

⑫ 「日本赤十字社録事」「日本赤十字」一九〇五年二月一日付第一七四号。

⑬ 杉山家に残されていた露子の蔵書の中に、一九〇七年(明治四〇)四月二五日発行の幸徳秋水の著書『平民主義』(隆文館)が一冊存在していたことが、富田林市史編纂室所蔵の調査カードによって知ることができる。

なお、一九〇七年三月下旬から廢刊直前の四月一二日に至るまでの日刊『平民新聞』には、幸徳秋水の著書『平民主義』の広告が、近日発売予定のかたちでさかんに掲載されている。

⑭ 日刊『平民新聞』一九〇七年一月二四日付第六号には、「竹久夢二氏の結婚」と題する記事が掲載されていて、「先づ頃目出度く結婚の式を挙げ牛込区宮比町四番地に新宅を構へたり」と記されている。

⑮ 「巡歴日誌」は、絲屋寿雄解題宮崎民蔵著『土地均亨・人類の大権』(実業之日本社刊、一九四八年)に収録されている。

なお、日刊『平民新聞』の一九〇七年一月一五日付第一号の「個人消息」欄には、「宮崎民蔵 土地復権同志会全国遊説の爲め目下関西地方に在り滔々社会改良家中、古の国士の倂を存する独り此人あるのみ、願はくは健在なれや」と報じられている。

⑯ 『衆議院要覧(乙)』(衆議院事務局刊、一九三七年二月)、衆議院參議院編『議會制度七十年史——衆議院議員名鑑』(一九六二年)。

⑰ 「巡歴日誌」の記述によれば、宮崎民蔵は杉山家を訪問した同じ日の五月二四日に、富田林の南西に位置する天野村(現在、河内長野市)に立ち寄り、その翌日五月二五日には大阪生玉町の令延寺を訪問したことになっている。

⑱ 森近運平は、一九〇七年六月一日付をもって『大阪平民新聞』を創刊している。この『大阪平民新聞』は、同年一月五日付第一号から『日本平民新聞』と改題され、翌年一九〇八年五月二〇日付号外をもって廢刊されるまで毎月二回発行された。発行所の大阪平民社の住所は、大阪市北区上福島北三丁目一八五番地であった。なお、この『大阪平民新聞』にも竹久夢二のさし絵が、しばしば掲載されている。

⑲ 前掲松村緑編『石上露子集』の解説には、露子は一九〇七年二月一七日に、長い青春の夢を自ら葬る心で婚礼の座に直つたと記されている。なお、前掲の杉本藤平の「日新誌」の一九〇八年(明治四一)六月一七日の条には、「杉山團郎氏、大和結崎村片山太郎氏方ヨリ養子披露アリ余出席スル」と記されている。

⑳ 一九〇八年の「明星」五月号の「社中消息」には、「千住湘江(佐賀)石上露子(河内)二氏は退社せられ候」と記されている。夫の妨害については、前掲松村緑編『石上露子集』を参照。

㉑ 前掲松村緑編『石上露子集』の解説には、一九三八年一月二七日付の『婦女新聞』に社主福島四郎が同紙創業の頃を語る「狂濤飛沫」という記事を書いたと記されているが、「狂濤飛沫」と

題する文章を同紙に書いたのは島中雄三であつて、これを福島四郎が書いたとしているのは、松村氏のあやまりである。

付記

本稿執筆にさいしては、小山仁示教授の御指導を賜つた。なお、富田林市史編纂室の玉城幸男氏には市史編纂室の資料を閲覧するにあつてお世話になつた。記して、感謝の意を表するしだいである。

野薔薇物語

夕ちどり

美しき水ゆるやかに流れて、小板橋一つ何となくかけ渡したる堤のかげにひとむらの野薔薇しげれり。

春さり夏きぬるほど、自然の神がやさしき情にはぐくまれて、いと少きくきよらの花かず多くもてり、その一つ一つには世ならぬうつくしきの香りをさへにかねて。

されど、人は皆都大路に散りにし花のなごりの涙のごふにいそがしうて、この初夏思ふはあらず、このごろを事多き野業にうみては、草かる童のむれも唯よそめにて過ぎゆくならり。

戦の子とや、かの恐ろしき毒ある剣もてる蜂、さてはあどかなる舞の羽袖、自由の幸ほこらしげなる蝶の、たゞ折々は音づれよりて心あくまで蜜を吸ひもとむるのみにして、

さはれ神の摂理をいとよく信じぬる野薔薇は、かくても露うらむべき姿はなくて、朝夕を絶えまなき水鏡にいよ／＼清

艶のおもかげをそえつ。

時のあゆみはひまなくめぐりて、星月夜、露地の領にいとどもしげかるほど、ひとり野薔薇は来し方のかへり見にふけりて、いと幸なかりしすぐせを覗じぬるに、折しも角笛の音遠方里におこりて心いよ／＼うらがなしう、はてはうなだるゝと見る一ひら二ひら、清香ひときは薫じていつしか水面上に消えぬ沫と散りそめつ。

この水、とほく野をよこぎり山をめぐりて流れ流れての末は、かの花多き都にいるなり。そこには若うして情やさしき詩人住みつ、はた、眉あげて道とくに年いと老いたる聖住みつ。

あはれ人生の趣にも相似たるかな。

(一九〇三年六月二十九日付第一六四号)

兵士

夕ちどり

朝餉の卓いつもわがすさびの夢ものがたり、けふもいざとやなをば上。

笑はせ給ふな、

いづらとしもなき魂のまよひの、よべわがあくがれの野は西部亜細亜。

ふりける世のおもかげなり。

カルデアの王の兵士のひとり、いまし、もの勇しう惨憺た

るいくさの場に出で立ゝむとするさまのそれにて、

ひるのほど、心大方ならず興来覚えて読みたる古史のゆく
りなくも、夜につかの間のわが夢ちに通ひしもをかじや。

そはうち渡す目ぢのかぎり、みどりはしげる山もあらず丘
もあらざる大野の直中、たゞ一すじの小川静かに流れてもの
むせびゆく調べの音は、わが村のそれにいとよう似たり。

一隊の兵士、見もなれざるあやしのものゝ具取りよろうて
この小川の水上かち渡るとするに、いづくよりかいま、みめ
美しきひとりのをみな、みどり子のいとほしげなるをかき
抱きもてあわたゞしう走せよるなりき。

「またせたまへ、わが背よしげし」

泣く音かぎりに打さけぶあはれのなげき、あな堪へずとて、
わがおほひにし袖のひまだにあらせず、一隊の中にまじれる
そが背を、をみなは狂乱の目ざしはやうも見いでつ。

「わが背よしげし、わが背は行きて残るのをさな児を抱き
つゝ飢ゑに泣くべきあすは思ふもつらし、わが背よ、とくこ
の児を取りて給へ、身はひとりものゝ心安う父母が故里にこ
そ帰らめ、いざとくわが背よ」

唯みどり児を兵士のほことる手に強ひむとて、香たかき髪
さへ長うふり乱したる喪心のをみながさま、あゝ狂ひてはか
くあさましき魔相も現じぬるものかや、

このひとゝき、

憤怒面に激してつとよりたる父なる兵士の、そが手にかな

し児奪ふもはやう、高くさゝげてなげ入れけるは打よする大
波のたゞなか、

小川の水たちまちにひろごりて怒号昇天に起りつ、大野は
強く悲しきうれたみの風たゞ吹きに吹き吹く。

としも見て、かくてよべまた例のわが身わびしきねざめを
しつ。

あゝをば上。

こはわが夢のまぼろし、たゞはかなき夜半のそれながら、
こゝに世は戦国の春を示して、われらまた醜き魔障のそれの
をみなの身なるを思ひたまはずや、

あゝをば上。 (一九〇四年四月一日付第二〇五号)

幽思

ゆふちどり

夕風、わがいたづらぶしの枕に近う、そとのびより来て
さゝやきて云ふ。

われいま、過ぎきのふの春の面影、たづねわびつゝ徘徊ひ
て来しいさゝ川の辺に、うすむらさきの藤の小花散りふかび
て云ひしらぬ情韻の一節、わが回憶の糸にかぎりなきあはれ
を語るを覚えき

きゝ給へ君。

かつての日なり、われ青葉の奥の幽の宮、そこにさびし
みの白裳長うおはする神の羽袖にそよぎて、美しき角笛の音に

通ひたりし日、野べ山べ、暮れゆく春のとしめにひとりかゝりて、静なる、長き愁に笑めるこのみを見き。

うすむらさきの、さなりかすかなるうすむらさきの、ゆかりの色のなつかしきこの花、

世にある日、ひとり春花の花やげなる時におくれて青葉にこもる姿は、たとはずやしみの恥ぢにかくるゝ詩をとめが、世をかくろひの面ぎぬかづけるうつくしのそれかや。

世をわれからなる晩春の空のなやみに馨香^{にほひ}て、人やわれや、つきせぬ幽思をのみつゞりにし此うすむらさきの花。

かの、よしと云ふ、うるはしと云ふ、世の詩人^{うたひと}が云ふ恋のながれの身は、其露にうるほふほだしながら、わがおもかげの花、遂に水の心にはうつさじとせしはかなの花の身なりしなり。

さいへこの花、あゝきは云へちの花、春野にこもる夢影いとふかき根ざしに生ひしうせの身の、胸にしゆるぐやさしき生命^{いのち}のみだれ、慕ひよるまぼろしの理想の宮の、うちに人よりせつなげなるが、それはたなからじやは。

けふ、ちりてうかびしいさゝ小川の水面には、やさしき絃歌のしらべもひゞきつ。

あはれ、そが世の生の夕山もとかげ、あまりにもまたさびしからずや君。

とおもふにもわれこの花の上に、あやしき涙のかつおつるかな……………

……………

いつしかわれ、長きうまるの静なる手におちて、この後の夕風が物がたりを知らず。

さるにても、とこしへにして、わが身また春を別れにし、あゝ、この初夏。 (一九〇四年六月六日付第二二三号)

をとめ

夕ちどり

襖^{はくまう}そとおしひらけば好き香のかをりして、幽花露したゝる北窓のもと、ねむれるがごとくその翁ぞゑたる。

(オ、よき子よ、ようぞ、いざこなたへ)

うつくしきおもかげかな、

岡の松原小野の逍遙のわがかへるさまちつけておどろかせたりしきのふのそれにあまりに似ぬなり。

いさゝかのけがれもゆるしがたきわが家門のほこりを、あらずをとめ子なればわれも聖なる天のちぎりの、高きは通ふ百合花のいのちのそれをもむげになみしはてたりし、かの日のかの物語を思ふと、わが若き胸はやあやしうわきだちて、頭にのぼる血しほのいかりは目くるめくやうまで覚ゆるなるも、をとめ子の恥の唯やさしきにおぢたりとのみや翁は見る。

(オ、よし、よし、かしこき子よ、わが言の葉に従ひて郷に孝悌の子たらんとする御身は幸なるかな、富の光り、樂欲^{らくよく}のにほひ、かくてぞそにつきせなき祝福のほまれある子よ)

あゝ何ものゝ魔かや、

やさしげの瞳子と、貴げの声音と、さては胸の上長う、世をいつはりの雪より清き白鬚の姿ふさはしうして、かくて道徳の裘衣美しきが下に、貪泉のあくなきをたゞふるこの翁とはそも。

山ならぬ、水ならぬ、人生かたき行路のそれにゆきなやむこゝらの子の、ゆきづりの情の宿、かなしうも立ちよりては胸に永久の苦惱の喘ぎ、かからん翁がため深う深うさざみ入られたりしを、われはまこと、けふまでにあまたゞび見たりしなり。

(いなとや、いなと云ふや、きけよよき子、世にわればかりぞ御身が心の奥の奥なるかすかなるその花の影のゆらぎはよく知るなり、さもあらばあれ、世は流転きはまりなき化性のそれ、理想とやよるべなき地上幻想のおろかしきにあこがれて、はては悲運の闇ちひとりまさぐりゆくなげきに添はんより、ようおもひ見よよき子。)

あな推参なる翁かな。

きのふ松原よりのかへるさにして、われはひとり夕夜の星あふぎてかたうちかひつ。

肉や名や、邪まなる利の黄金ぐつわにつながれたる、卑き翁がこの貪心の生贖とゆかんよりは、脅迫の手、わが頭上に落ちなばおちよ、あらがひてあらがひて、さてむしろ死なんまでもと。

あゝよしや、さなりよしや、現し身かよわきをみなにして小きき反抗の力、すべて世にむやくなりときかん日とも、

(かしこき子よ、何とてわが云ふ言にいらへせぬぞ。)

やう／＼偽善の美しき粧ひうすれて、しうねくもむごき恐ろしきすがたに翁はるよりぬ。

(かぎりなきもとめ、涯なきむさぼり、とこしなへにあらぬ願ひにたばかられあざむかれて、オ、よき子よ、よう思へ、幼うして父母はらからを遠き北海のあなたに別れ、故園にひとりよるべなきみなしごのはかなき宿世の汝が身を、かすかなる血縁のゆかりにあはれと見てのこゝらの幾あけくれ、雨しらぬ風しらぬなきけの袖のおほひに美しき衣させ美しき名添へて、なでしこのちりもすえじと生ふし立てしはまこと、かの子が父、御身が伯父なるその人ならずして誰ぞ。

ましてやこは、その人臨終の悲しき床に切なる願ひのそれなりしと云ふを。

ときに章台楊柳を折るの子と、よからずや、それもいづれはおしなべていまを世に才ある子が佛なるもの、たゞようこし方をおもへ、女なる身のすぐせをおもへ。

さならずば、オ、さなりさならずばよき子よ、この翁われ、けふより栄達きはみなき彼の子が貴き心にふれざらんがため、毒ある呪ひの舌、専心中傷にゆだねて美しき御身がゆくてをなやまさんに、かくてもかなほ、よう思へ、かしこき子よ、きたなし翁、いかにともせよかし、われはこの世にすぎる

に親の何もあらぬ子なりとのみ、くちびるかみて唯涙ふくむに、このしばし、翁も云はず。

山かげのやど、夏としもなきまひるの姿静にして。

あゝかゝらん時、かゝらん日、いかにするらんこのさだめのまへ、心やさしき大方のわが友のをとめは。(をはり)

(一九〇四年八月二日付第二四号)

異性

杉山孝子

姫が起伏の花園に小さき草あり。

そは、そのかみ、心ぎま申う、さはれ自らはいと厳正に、園守る手業世の大方の人に立ちすぐれたるを信じて、ほこりとなせる園守がかりそめの午睡のひまを、翅白き夢の鳥、天より来ておきたる種のかく芽ぐみしなるをば誰れも知らず。み空には月の姿、円にしもなり行くなべにさゝやかなる緑の蔓しげりて、其葉がくれ、同じき色の小花は世ならぬ奇しき香を夜毎にはなつ。

朝ざめの木かげに、夕の川床に栄えある天の生命をたゞへて、露ふかう美しきこの園に共栖の蝶はたるの、なべて、皆がらうれしきわが世の詩の魂とたゞむつぶに、怪かしの思ひに醒めし園守はいかで其香のもとさぐらんと一日くまなう求めて夏草がくれ、この異様なる小草を見いでつ。

『あらず、こは魔性のものなり。正しうけがれなきわが姫が

天授の花園に生ふべく、かゝる異様の姿したる小さきものはあまりにふきはす』

とて園守は足もてふみにじりしが、またの日、ふたゝび、小草はまたさらに栄えある様に花も葉も、蔓も香もまさりて、生ひ茂りたるを見て、

『こは、まことに魔性のものなり』

と、内心の恐れに根ながら引き去りていろり火の焰に投じさりつ。

あはれ其後、姫が起臥の花園、うちに靈郷の通ひち絶えて、憂愁の露さびしき幻にして立迷ふをも、心厳正なりしをなほたのみて園もりは、

『かくてこそ、わが姫が花園とこしへに安かれ』と。この小草、名を異性と云ふ。

(一九〇五年七月三日付第二六九号)

絹手毬

夕千鳥

奇しき糸の手、さまゝの彩と身をめぐりて、迷想はてしなく美しきけふしもひとり、姫が手箱のうちに夢心地と、われは永久なる春のたのしきうれひに添ひたり。

幸ある身よ。

春なりとよき音のうぐひす、巖室出でゝほのかなるほゝ笑みすがた、こゝに新しきわが世の調べと鳴くにしも、人はな

ほ、世のさだめ、いよゝ忘れがたき流離の痛みをかこつに。
幸ある身なり。

来し方よ。

身ははぐれにし花草の、あらぬとにはあらぬわれ絹手毬の、
かくて、日もすがらおもひでの涙、うらゝかなる日かげの窓
をなつかしう流れて、消えしらぬまぼろしがたりの、その花
の夢こそわが世、魂はたゞとこしへのうるほひふかき光りの
涯をぞあこがるゝなる。

さは。はぐれにしかげ、泌みぬる世の、その日のおもわ、
人の世の情に知らぬやさしきゆらぎなりつればならしや。

夢か。真白翅、清らにほのに、我が空想の女神が愛児と、
只何処にもふさはしきそが夢見すがたの、一たび、君により
引かれて入りし霊のみ園の、瑞木生ふいのちのかけは、現し
身かざる色糸の、このあえかなる命運にも通ふを。

いまかくひとり。

姫が宝箱にありし日のうつらゝ、さては、召されて出づ
る歌舞のあしたの庭の面のそのすさびにも、露身はうすれし
らぬあこがれ心地をこそおもへ。

詩人ならねども。

あたゝかき涙おつるに。

幸ある身よ。

とこしへにかくてぞ死なむ。

(一九〇六年一月一日付第二九五号)

関西大学史学会

昭和57年度収支決算報告書

収 入	1,269,174円
前年度より繰越	410,193円
会 費	772,590円
史 泉 売 上	54,460円
レジュメ売上	20,000円
利 息	11,931円
<hr/>	
支 出	1,020,290円
事 務 費	33,069円
史学会大会費	104,848円
史 泉 57号	682,600円
郵 送 料	40,383円
振込用紙ほか印刷代	22,680円
印 判 代	33,000円
事務員謝金	103,710円
<hr/>	
差 引 残 高	248,884円